



「誠実と努力と技術力とを以て他を圧倒すること」。70年前の3月31日に設立された大豊建設の創立宣言に書かれている。技術者集団を率いる大隅健一社長は「どこに出しても恥ずかしくない技術で、他社から声をかけられる（なくてはならない）会社を目指してきた」と強調する。100年企業に向け本社のビルを改装、気持ちも新たに企業価値を最大化するための技術を磨き、人材を育てる。

平成5年に開通した東京湾連絡橋「レインボーブリッジ」。植物を支える根のように、この吊り橋を支持し安定させている橋梁基礎は、大豊の特許技術「ニューマチックケーソン工法」で施工された。

同工法はコップを逆さまにして平らに水中に押し込むと空気の圧力により水の浸入を防ぐという原理を応用。下部に作業室を設けた鉄筋コンクリート製の箱（ケーソン）を地上で造り、作業室に地下水圧に見合う空気（ニューマチック）を送ることで水を排除して掘削し箱を沈める作業を行う。



オープンルームでの会議

近年の異常気象による浸水対策や地下空間利用のニーズがケーソンの大型化と大深度化へとつながり、安全や環境に配慮した同工法にますます注目が集まっている。

（後のニューマチックケーソン工法）、46年にドルフィンドック工法、59年に泥土加圧シールド工法など次々に特許を取得。工法のパイオニアとして建設業界を牽引することで地位と信頼を築いていった。中杉正伸取締役専務執行役員は「時代が必要とする技術を発明してきた。今も生きている。根本は変わらない」と大豊の魅力を説く。

社名の大豊は満州国（当時）の第二松花江に建設された巨大ダム「豊満ダム」に由来する。外地の巨大ダム建設工事で活躍した土木技術者集団が戦後引き揚げて起こした会社がルーツだ。建築事業が成長した今、土木事業との車の両輪経営を確立した。

創業世代が築いた「技術の大豊」を次代に引き継ぐため、新たな開発拠点「新機材センター」（茨城県阿見町）が本格稼働。ケーソン工法などの独自技術の進化と新たな工法の開発に挑む。創業時から育まれてきたチャレンジ精神が大豊ブランドを高める。